

小川未明「赤い蠟燭と人魚」論

—— 伝承説話の影響と創作的付加をめぐって ——

堀 畑 真紀子

はじめに

一九五二（昭和二七）年、未明七〇歳の時、三越劇場で「赤いローソクと人魚」（重森孝脚色）が上演された。その時、未明はプログラムに「思い出の一端」と題して次のような文を書いた。

私は、日本海の鳴音に耳を傾けながら、伝承説話や、当時の漁村と町の生態を参照して、この物語を構成しました。

（岡上鈴江「赤いろうそくと人魚」をつくった小川未明
— 父小川未明 — ゆまに書房一八七頁）（傍線堀畑）

「赤い蠟燭と人魚」には、「伝承説話」の要素と「当時の漁村」の状況、「町の生態」が含まれている。「当時の漁村」の様子は上笙一郎氏が、「越後高田」（注1）との類似点を指摘している。「町の生態」については、菅忠道氏が、捨て子、過

酷な少年労働、人身売買などの当時の児童問題を指摘する（注2）。「伝承説話」については三つの論説がある。上笙一郎氏は、潟町雁子浜の人魚塚伝説との比較から「赤い蠟燭と人魚」との共通点を七点指摘した（注3）。小山直嗣氏は中頸城郡大潟町の人魚塚の縁起が「赤い蠟燭と人魚」のヒントになったという（注4）。この小山氏の論に対しては、大森郁之助氏の反論がある（注5）。このように「伝承説話」の影響について、「潟町雁子浜の人魚塚伝説」、「中頸城郡大潟町の人魚塚の縁起」が指摘されているが、私は「赤い蠟燭と人魚」の中にみられる伝承説話はこれだけにどまらないと考える。また、「町の生態」では、菅氏による捨て子、過酷な少年労働、人身売買の指摘があるが、その他にも次の点が指摘できる。それは、香具師の言葉と金への魅力に真心を捨てて、愚かにも心変わりする老夫婦の姿である。そこには貨幣経済に蝕まれる「町の生態」が窺われる。その他、西洋的な要素も指摘できるが、今回は、日本の「人魚塚伝説」以外の「伝承説話」（「小さき子」話、

「竹取物語」、羽衣伝説、昔話)にしほって論じていく。

一 作品の構成

「赤い蠟燭と人魚」には、(ア)「小さ子」話、(イ)「竹取物語」、(ウ)羽衣伝説・昔話の影響が指摘できる。まず、それぞれの「伝承説話」の類型を説明し、その後「赤い蠟燭と人魚」との比較によって類似点、相違点を導き出すことにする。類似点は「赤い蠟燭と人魚」が影響をうけたものと考えられる。相違点は、未明が「赤い蠟燭と人魚」を執筆する時、創作的付加をなした部分と見なすことができる。

一・一(ア)「小さ子」話

お宮の石段の下で拾われた人魚の娘が、不思議な力を持ち、周りの人々に幸福をもたらす。このように異界から人間の世界へ入って来た「小(ちい)さ子」が、異能を発揮し、人間に幸福をもたらす話は、日本古代の説話から連綿と語り継がれてきた「小さ子」話の型と一致する。

「小さ子」話について、『日本伝奇伝説大事典』(角川書店一九八六・一〇・一〇 五八九頁)をまとめると次のようになる。

①異常に小さな子供として出現する。

②主人公は異常な誕生をする。

③昔話では神に祈願して授けられた申し子として説かれるが、その形式でなくても、中空な容器からの誕生、水辺からの出現、水神性を帯びた小動物の誕生など、神話における神々の出現に通いあい、神聖なる存在という属性を保っている。

④主人公の不思議な成長ぶりを説く。

⑤異能を持つ。

⑥遭遇する厄難を克服したり、難事業を完遂する。

⑦富みを獲得する。

⑧良き配偶者を得て、幸福な生涯を送る。

この「小さ子」話の特徴を「赤い蠟燭と人魚」にあてはめると次のようになる。

①×(×印は類似点なし 以下同じ)

②○娘は、海に住む人魚が生んだ子供で、石段の下に捨てられる。

③○人魚は水界とかかわりを持ち、「水神人的性格」を持つものとして解釈される。また、娘がお宮の石段の下に捨ててあったことや老夫婦が「神様のお授け子」と言っていることから、娘が神聖なる存在であることを暗示している。

④×

⑤○娘はお爺さんの作った蠟燭に、誰に習ったわけでもないが、魚や貝、海藻のような絵を上手に描いた。その絵は誰をも引

きつける不思議な力を持つ。

⑥△娘が描いた絵の蠟燭を山のお宮にあげ、その燃えさしを身に付けて海に出ると災難から免れることが出来た。

⑦○貧しかった蠟燭屋は、娘の描いた絵の蠟燭によって繁盛した。

⑧×

以上より、①④⑧は欠けているが、②③⑤⑦には「赤い蠟燭と人魚」と「小さ子」話の類似点が強く認められる。⑥はわずかながらに類似点が認められる。ここから「赤い蠟燭と人魚」は「小さ子」話の影響を受けて出来上がっていることが理解出来るよう。

「小さ子」話と「赤い蠟燭と人魚」の相違点は、①異常に小さな子供として出現する④不思議な成長ぶり⑧良き配偶者を得て、幸福な生涯を送る③の三点である。未明は、人魚の娘を人間の子供のように描くことよって、周りの人々に流されていく消極的な性質を持たせる。そして、当然不幸な娘として描く。ここが、未明の創作的付加である。

一・二(イ) 「竹取物語」

「物語」の定義については、「岩波日本古典文学大辞典」(阿部秋生執筆)を参照した。物語には伝奇性と写実性が含まれるが、ここでは特に「物語」の基本的性格としての「伝奇」

に重点をおいて捉えておく。また「物語」の話題は、「和歌・恋愛・音楽・仏法・神事・怪異等さまざまだが、国家・政治・経済のあり方などに関するものではなく、私生活の中の話題である。その点でいえば、すでに日常の雑談・世間話の類である。「物語する」とはこの意味にも用いられる」とある。

「物語」には「物語の場」(注6)が存在し、「物語の場」には素材、聞き手、語り手が存在する。「赤い蠟燭と人魚」を文章表現からみると、「物語の場」が見えてくる。「青うございしました」「物凄うございました」「この箱を娘が見たら、どんなに魂消^{メタ}げたでありませう」の表現は、聞き手を想定して書かれたものである。

「物語の出で来はじめの祖」(「源氏物語」と呼ばれる「竹取物語」は、「古代的な伝承性の地盤の上に、かなり無造作に現実性が重ねられている」(注7)という特徴を持つ。

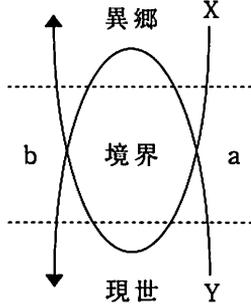
「古代伝承性」とは、「竹取物語」では、「天人女房譚」・「求婚譚」などである。「赤い蠟燭と人魚」も「人魚塚伝説」のような伝承説話の地盤の上に、当時の「漁村と町の生態」を重ねている。

また、高橋亨氏は「前期物語の話題」(「日本文学」一九八六・五)で「竹取物語は羽衣型(白鳥処女型)を外枠とした異郷譚の基本構造」を持っているとし、次のような図で説明する。

異郷の女(かぐや姫)

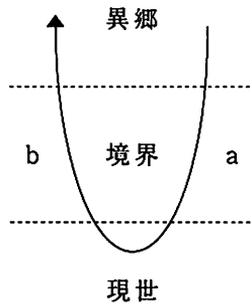
異郷を訪れた男

(浦島太郎)



この「竹取物語」の構造を「赤い蠟燭と人魚」にあてはめると次のようになる。

人魚の娘



さらに、「竹取物語」型では「現世」の部分が「自由区域」(注8)と呼ばれ、原作者の創意が発揮される部分であるように「赤い蠟燭と人魚」も又、同じである。

このように、物語の構造において「赤い蠟燭と人魚」と「竹取物語」では大変似ていることより、「赤い蠟燭と人魚」も

「物語」の類型であると言える。

「赤い蠟燭と人魚」と「竹取物語」とを内容から比較すると、類似点、相違点、創作的付加が指摘できる。

【類似点】

- 1、養育者が、貧しい、子供のいない善良な老夫婦であること
- 2、「小さ子」話を骨子としていること
- 3、異能によって難問が生じること

「赤い蠟燭と人魚」では、店が繁盛する事によって老夫婦が変心する。「竹取物語」では、かぐや姫の美しさに惹かれて貴公子、帝が求婚をする。

- 4、月光の美を描いていること

「赤い蠟燭と人魚」では人魚が陸に出てくるのは、月の明るい晩である。また、人魚の娘は疲れ悲しんでいる時、月を眺め、香具師に売られて行く時も、月の明るい晩であった。

このように、人魚の母親、娘が描かれる場面は、月の美が描かれる。「竹取物語」では「土俗世界の暗い不安を照らす禁忌の月ではなく、透徹した清浄玲瓏世界の象徴としての月が、

「竹取物語」の月」(注9)である。

- 5、異郷との断絶であること

「赤い蠟燭と人魚」では、人間の世界で裏切られた人魚は海の世界に帰っていくことが暗示されている。「竹取物語」では、かぐや姫の結婚拒否、「不死の薬」(注10)、「天の

羽衣」（注11）が人間世界と月の世界の断絶を暗示している。

【相違点と創作的付加】

「相違点」には未明の創作的付加が含まれてくる。ここではまず、「相違点」を指摘し、その後、未明の創作的付加を説明する。

①主人公の姿

「赤い蠟燭と人魚」では人魚の姿であるが、「竹取物語」では人間の姿である。創作的付加としては、「人魚」のイメージの変化がある。胸から上は人間の姿、胸から下は魚の形という「人魚」のイメージは、大森郁之助氏も述べるように「民間の伝承の内部に育ってきたものではありえない」（注12）。「赤い蠟燭と人魚」における「人魚」のイメージは、近代文学から得たものであろう。「赤い蠟燭と人魚」以前には、アンデルセン「人魚姫」（一八三七）、谷崎潤一郎「人魚の嘆き」（一九一六）がある。これらの人魚像が影響したものであろう。

②主人公の成長

「赤い蠟燭と人魚」では、人魚の娘が生まれた時の体長やその後の成長は、人間と同じである。「竹取物語」では、誕生時は小さな赤ん坊であったが、三ヶ月ほどで一人前の大きさになった。

未明は、人魚の娘の成長を人間の子供のように描くことによって、娘の性格に未明自身の児童観を反映させている。その

児童観とは、アへ子供は良心、正義感をもっている、イへ子供は純真な感情を持つている、ウへ子供はロマンチストであるの三点である。これは未明独特というよりも、「赤い鳥」時代に共通する児童観である。

③異郷の相違

「竹取物語」では、異郷は月の世界（天上界）で、人間の憧れを象徴する世界（美しく、老いず、憂いのない世界）である。「赤い蠟燭と人魚」では異郷は海の世界である。そこは冷たい、暗い、気の滅入りそうな、住みにくい世界であった。現世は人間の世界で、人魚にとって理想とする世界である。その世界は、人魚の母親の主観的なイメージである。

創作的付加として未明は、母親がなぜ子供を手放すかという理由を述べる。そこには母親の子供に対する思いが窺われる。この思いは、未明の「母性こそ自分の身を空しくして自己の犠牲を厭はず、その子供のために熾烈の愛に殉じようとするもの」（注13）という主張、つまり、人魚の母親の行為は美しい人間性であることを暗示しているのである。また人魚にとって理想の世界が人間の世界である点については、未明の願い、つまり、人間の世界は理想的な世界であってほしいという願いが暗示されている。

④主人公が老夫婦の家を去った後の相違

「竹取物語」では、かぐや姫は地上界に思いを寄せつつ、天上界へ帰る。その後、地上界では、かぐや姫のことを思い、悲

しむ。「赤い蠟燭と人魚」では、人間に裏切られた人魚は海の世界に帰ることが暗示されている。その後、「あらし」によって町は亡びる。これは「竹取物語」には窺うことができない。

「人魚塚伝説」には「あらし」があるが、町は亡びるまでにはいかなない。「町が亡ぶ」結末は未明の創作的付加である。ここには、「人魚塚伝説」を受けながらも、日本の怨霊思想（注14）を加えることで、人魚の母親の怒り、悲しみを強調したのである。

以上、「竹取物語」と「赤い蠟燭と人魚」の比較から、類似点、相違点、そして創作的付加を述べた。先に、構成の面から「赤い蠟燭と人魚」は「竹取物語」と似ていて、「物語」の類型を持つことを述べたが、類似点からもその点は読みとれよう相違点からは、未明の創作的付加が明らかになった。

一・3 (ウ) 羽衣伝説・昔話

ここで取り上げる羽衣伝説は、「丹後国風土記逸文」羽衣伝説（注15）で、「竹取物語」に影響を与えたものの一つとされている。比治の山の頂きに真奈井という泉があった。この泉に天女が八人舞い降りてきて、水浴びをしていた。老夫婦がこの泉に来て、天女の一人の上着と裳を隠した。老夫婦は、その天女に自分達の子供になつてくれないかと頼む。天女は、自分一人が人間の世界に留まつてしまったために、老夫婦に従わないわけにはいかなんと言いが、上着と裳は返してくれるように頼

む。しかし、老夫婦は騙そうとしているのだらうと言って、上着と裳を返そうとしなかった。天女は、天人の志は誠を根本としている、老夫婦こそ疑いの心を持っていると非難する。そこで老夫婦は天女に上着と裳を返す。天女は、老夫婦の家で十余年暮らす。その間、天女は万病に効く酒を造り、老夫婦の家を豊かにする。その後、老夫婦は天女が自分達の子供でなく、しばしの間借りて住んでいたのだから、もう出て行くようにという。天女は悲しみ泣く。そして、老夫婦に自分の意志でここに来たのではなく、あなた方が望み願ったからここに住んだのに、どうして捨てられるのかと訴える。だが、老夫婦は怒って、天女を追いだす。天女は、長い人間の世界に居たので、天に帰ることはできないと嘆く。天女は悲しみ、嘆きながら各地をさまよい歩き、奈具の村に落ち着く。この天女が、竹野の郡の奈具の社に鎮座しておられる豊字加能売の命である。

昔話は、熊本県玉名郡春富村の「竜宮童子」である。昔、肥後の国の真弓という山奥に、一人の爺がいた。山に入って薪を伐り、それを町で売って生活を営んでいた。ある日、薪が売れなかつたために、町の真ん中を流れている川に、その薪を投げ込み、竜神様に拜んで帰ろうとした。その時、美しい女が爺を呼び止める。女は竜神様の使いで、爺が正直で勤勉であること、今日も薪を持ってきて竜神様にさしあげたことを大変喜んでおいでになることを伝え、その褒美に、はなたれ小僧様を預ける。はなたれ小僧様はなんでも願いを聞いてくれるが、そのかわり

に海老のなますをこしらえてお供えしなければならぬ。家に帰った爺は、早速はなたれ小僧様に、家や米、金、道具などを出してもらう。わずか一月程で、爺は大金持ちになった。今の爺の仕事は、毎日町に出て行って、なますにする海老を買うことであつた。しかし、月日が経つうち、その仕事が面倒になり、爺は、はなたれ小僧様を神棚から降ろし、はなたれ小僧様、もうお願いすることがありませんから竜宮へお帰りくださいと言つた。それを聞いて、はなたれ小僧様は外へ出て行き、鼻をすする音をさせた。そうすると徐々に、家や倉などが消えてなくなり、あとにはあばら屋ばかりが残つた。爺は、はなたれ小僧様を捜したが見つかることは出来なかつた。

「赤い蠟燭と人魚」と羽衣伝説・竜宮童子とを比較すると次のようになる。

【類似点】

1、家を追い出される主人公

「赤い蠟燭と人魚」の人魚は純粋な心を持つが、老夫婦の愛心をどうすることも出来ず、ただ悲しむ存在として描かれている。羽衣伝説では、天女が万病に効く酒を造つて老夫婦の家を豊かにしたにもかかわらず、後に、老夫婦は、天女が自分達の子どもではないという理由で家から追い出す。この老夫婦の愛心を天女はどうすることも出来ず、悲しみ泣いて、家を立ち去る。「竜宮童子」でも、はなたれ小僧様は何も言わずに出てい

く。

2、変心する前の養育者の性質

「赤い蠟燭と人魚」では、変心する前の老夫婦は、正直で勤勉、善良である。これは「竜宮童子」でも同様である。羽衣伝説では、天女が人間界に残るきっかけは、老夫婦が羽衣と裳を隠したことによる。しかし、その後、天女が不思議な酒で老夫婦の家を豊かにすることから考えると、老夫婦はじめは悪い性格ではなかつたと想像される。このように変心する前の老夫婦の性質に注目すると、「善良で正直のもの」という特徴が窺われ、この「善良・正直」という性格は、昔話の善の理想像である正直爺さん（またうど）と同じである（注16）。そして「またうど」には神が宿つているのである。変心前の「赤い蠟燭と人魚」の老夫婦の性質は、この「昔話」のパターンを踏襲しているといえるだろう。

3、養育者の変心

「赤い蠟燭と人魚」では、老夫婦は店の繁盛によつて金欲をもつようになる。そしてついに、「神様からの授かりもの」として大切に育てていた人魚さえも売つてしまふ。このように「赤い蠟燭と人魚」では老夫婦が変心する。羽衣伝説では、老夫婦は泉に水浴びに来ていた天女の一人に自分達の子どもになつてくれなやかと頼む。天女は老夫婦と十余年暮らす。その間、天女は万病に効く酒を造り、老夫婦の家を豊かにする。しかしその後、老夫婦は天女を家から追い出す。「竜宮童子」で

も爺は、はなたれ小僧様に富を与えられたにもかかわらず、海老のなますをこしらえてお供えするのが面倒になり、竜宮に帰るように言う。

いぬいとみこ氏が、老夫婦が「じつにつごうよく、さつきは神罰をおそれていたかと思うと、つぎには大金の魅力にまけて神罰のことは忘れ、さらにもた、あらしがおこると、さっそく神罰のおそろしさを思い出さうそく屋をやめる、というよくな不安定な人間につくられている」(注17)ことを指摘している。「竜宮童子」、川越地方の「狼地蔵」、加賀江沼郡の「鼠の浄土」などは昔話の善の理想像である正直爺さんが、無慈悲で欲張りな慳貪爺さんへ変心する。「赤い蠟燭と人魚」の善良、正直な老夫婦が、無慈悲で欲張りに変心するのは、この昔話のパターンを踏襲したと考えられる。

【相違点と創作的付加】

①養育者の変心後。

「赤い蠟燭と人魚」では、人魚の娘が香具師に連れて行かれたその晩、あらしがおこり、老夫婦は「神様の罰があつた」と言つて、蠟燭屋をやめる。しかし、あらしはその後も続き、幾年も経たずしてその町はなくなる。「竜宮童子」では、爺の変心後、今までの富は消える。羽衣伝説では、老夫婦のその後の記述はない。

昔話では、「またうど」が「慳貪爺」に変心した時、神の子

は去り、今までの幸福にひびがはいるだけであつた。しかし、「赤い蠟燭と人魚」では、それではすまされない。変心した老夫婦は人魚を売り、その結果、「あらし」による町の亡びという大鉄槌が下される。ここが未明の創作的付加である。この「あらし」による町の亡びは、「小さ子」話・「竹取物語」・羽衣伝説・昔話のいずれにも存在しないものである。

以上、「赤い蠟燭と人魚」と「小さ子」話・「竹取物語」・羽衣伝説・昔話を比較し、物語の構成、類似点、相違点、創作的付加を見てきた。「小さ子」話の類似点からは、「赤い蠟燭と人魚」が「小さ子」話の影響を受けて出来上がっていることがわかつた。相違点からは、人魚の娘が消極的な人物、不幸な人物として描かれていることがわかる。この点が未明の創作的付加である。「竹取物語」の構成と内容の類似点からは、「赤い蠟燭と人魚」が「物語」の類型であることが判明した。相違点からは、人魚像が近代文学から取り入れたものであること、子どもには自己犠牲を厭わない母親像を描いたこと、人魚の娘に「赤い鳥」時代の児童観を反映させたこと、「あらし」による町の亡びが、日本の怨霊思想であることが明らかになつた。これらに未明の創作的付加が窺われる。羽衣伝説・昔話の類似点からは、「またうど」の性質と養育者の「変心」が読みとれた。相違点からは、「あらし」による町の亡びが未明の創作的付加であることが明らかになつた。これらを踏まえた

上で、「赤い蠟燭と人魚」の問題点を検討する。

二 「赤い蠟燭と人魚」における

「あらしによる町の亡び」の解釈について

二・一「あらし」の場面に對するこれまでの解釈

「赤い蠟燭と人魚」の結末に「あらしにより町が亡ぶ」場面がある。この場面の解釈について、これまで多くの論考が重ねられてきた。

古田足日氏は、「あらし」は未明の心中の解決であつて、外部世界の矛盾の解決ではない、と指摘する（注18）。この指摘に對して、菅忠道氏は「社会不正（注19）についての作者のいきどおり」が、象徴的な力によつて解決されたもので、その解決方法は「アナキズムの強い思想的影響下にあつた時代」の産物（注20）であるとし、「あらし」による解決を弁護する（注21）。高橋美代子氏は、菅氏の「アナキズム」という観点を継承し、最後の、町が亡びる場面を「残忍の限りを尽くしたあとには、本當の人間性つまり愛が生れるというものである。未明の悪の凝視である。そして金欲、金力にかかわらず、漠然とした形で人間世界への怒りを象徴している」（注22）と解釈する。鳥越氏は、「未明童話には、たしかに町をも滅ぼすほどの強力なエネルギーの存在はみとめられても、そのエネルギーは常にマイナスの方向にのみ働いて、決してプラスの方向へは

働かないのである」「残るのは、強烈な・鮮明なイメージのみである」（注23）という。そして、未明童話を「アダルト・メルヘン」として位置づける。上笙一郎氏は、古田氏の「あらしは、外部世界の問題解決にはならない」という説は受け入れるが、鳥越氏の「ネガティヴなストーリー」という主張に對しては反論し、そこには「未明が噴出させたアクティヴなエネルギー」が存在すると考える（注24）。

これらの諸氏の論に對して私見を加える。古田氏は、人間と人魚の關係は、背後に色々な關係を含んだ象徴的なものであり、その象徴的な關係に含まれた諸問題の解決に「あらし」を持つてきては何も解決されないと述べる。しかし、この解釈には視点のズレが生じていると思う。「赤い蠟燭と人魚」を「物語」・「昔話」の視点から評価すると、未明がつけた「あらしによる町の亡び」という結末には意味があると考える。菅氏や高橋氏の「アナキズム」という視点は、「赤い蠟燭と人魚」を書いた當時の未明の思想を考慮すると無視出来ないものがある。しかし、「アナキズム」という解釈は、飛躍した解釈であり、説明を排除した結論であらう。「赤い蠟燭と人魚」の結末にはもつと適切な説明が可能である。鳥越氏の「ネガティヴな結末」という指摘には首肯できる。しかし、未明童話を「アダルト・メルヘン」とする主張には疑問がある。この作品は「物語」・「昔話」という観点で評価すべきものである。上氏の「アクティヴなエネルギー」は「アナキズム」と同類のも

ので、説明を排除した解釈である。

二・二「あらしによる町の亡び」に含まれる怨霊思想

この作品は、「小さ子」話、「竹取物語」、羽衣伝説、昔話を踏まえて出来た作品である。未明はそれらを取り入れて、「赤い蠟燭と人魚」を書いた。しかし、それらの伝承説話の類には「あらしによる町の亡び」という結末は存在しない。未明は、それらの伝承説話を踏まえながら、それらとは異なる新しい結末を創作した。それが未明の「創作的付加」である。以下、未明が「創作的付加」をなした「結末」を具体的に見ていく。

わが子が香具師に売られた事を知った時、人魚の母親の怒りと悲しみは深かった。大切なわが子、人々に幸福をもたらしたわが子を、老夫婦は獣として売った。そして、人々はそのことを非難しなかった。「自己の犠牲を厭はず、その子供のために熾烈の愛に殉じよう」（注25）とした人魚の母親の怒りと悲しみは計りしれないものであった。人魚が売買された後、赤い蠟燭がお宮にともった晩は大暴風雨になる。老夫婦は「神様の罰が當つたのだ」といって、蠟燭屋をやめた。しかし、その後もお宮に上がる赤い蠟燭は人々に災難をもたらした。人々から有り難い神様だと言われていたお宮の神様は、今では町の鬼門となり、人々はそのお宮の神様を怨んだ。人間を信頼し、ただひたすら子どもの幸福を願い、わが子を手放した母親の思いと、

人々と町の安寧を保ち続けてきた神の加護は、最後まで裏切られ続ける。

「あらし」は、人々の裏切りに対する神の怒りであろう。そこには、日本の怨霊思想が窺われる。「祟り」現象とは、「特定の人間の執念や怨念が凝りかたまつて呪詛霊となり、それに感染することによって異常現象が発生する」（注26）ものである。「神道に謂ふ祟は神の永遠の處罰ならずして改悛悔悟の行為を豫想したるもの即ち懲惡の意味を有する神罰として解せられたるもの、如し」（注27）。よつて、祟り霊は祭礼や祈禱によつて鎮められる。この「祟り」は、現在の日本でも根強く残っている（注28）。人魚は神の子である「小さ子」であつた。その「小さ子」を売つたことに対して、老夫婦は、自分達が人魚の娘にした行為を反省することなく、「神様の罰が當つた」と言つて蠟燭屋をやめる。神様の罰が怖かつただけである。また、町の人々が人魚の売買に何も異議を唱えなかつたことは、この町では子どもの売買が容認される風潮だつたことが窺われる。人々は、不幸をもたらすお宮の神様を怨み続ける。このように自分達の行為を反省しない老夫婦や町の人々に、「改悛悔悟の行為を豫想」して、人魚の母親の怨みが「祟り」となり、罰を下されるのである（注29）。

続橋達雄氏は「未明童話の研究」（明治書院一九七七・一・二〇）で、へ私（未明―私注）の守袋の中には星除や、加持、祈禱の札が沢山入つてゐた」こと、未明が癩癩持ちのために母

がへ米山の薬師へ連れて行つて、お加持をして貰つたことに
ついて次のように述べている。

こうした習俗にひそむ信仰を未明が受容したかどうかは別
としても、これはかれの生命感情や靈魂觀に深い影を落と
して行く。後に神秘的なもの象徴的なものに魅せられ、死
を介らせて神秘的世界へのおこがれや怖れを語りつづけ
たことなど、その現れといえよう。古い習俗の底にひそむ
靈魂觀・生命觀が未明らしい衣装をまとしてその文学によ
みがえって行くことになる。(一八頁)

「習俗にひそむ信仰」の一つに、怨靈思想(祟り)があると
考えられる。未明の作品には、この思想を「赤い蠟燭と人魚」
以外に、「黒い旗物語」(一九一五)、「牛女」(一九一九)、
「黒い人と赤いそり」(一九二二)などに窺うことができる。

二・三 怨靈思想による解釈

「あらしによる町の亡び」について、鳥越氏は「ネガティヴ
な結末」であると主張し、菅忠道氏、高橋美代子氏、上笙一郎
氏等は、「アナーキズム」な結末であると主張する。それらに
対して、私は、この結末は日本古来からの怨靈思想によつても
たらされたと解釈すべきであると考ええる。古田足日氏は「「あ
らし」は、象徴的な諸問題の解決にはならない」と述べる。し

かし、この場面において、作者未明の心情は、信じていた人間
に最愛の娘を売られた人魚の母親の悲しみ、憤りに焦点が移つ
ている。

未明は「思い出の一端」の中で次のように述べる。

ひつきよう人間性は貫いものであつたが、人間性を頼つた
ばかりに、幻滅を感じたのである。おのれを犠牲とし、ひ
たすら娘の幸福を願つた、母親の心根を思うと、あまりの
いじらしさに泣かされたのでした。金のため、心が腐つて
眞実が踏みにじられたと分かつた時は、人魚の母親たらず
とも、私は、人間に対する絶望と憤りの念を禁じ得なかつ
たのです。(岡上鈴江「赤いろうそくと人魚」をつくつ
た小川未明―父小川未明―ゆまに書房一八七頁)(傍線
堀畑)

さらに「藝術の暗示と恐怖」では次のように述べている。

藝術に含まれたる童話的價値は人間の無反省と、心の荒廢
とから蘇らせることにあるのだ。物質文明によつて汚辱さ
れた、魂の面を拂拭して、永久に、不測の自然に對して、
何人もが最初に持つ、驚異、敬虔、純眞の感情を新たにせ
しめることにあるのだ。(「小川未明小説全集6」講談社
一九四五・一〇二〇〇頁)(傍線堀畑)

未明は、「人間に対する絶望と憤りの念」で「人間の無反省と、心の荒廢とから蘇らせる」ために町を亡ぼすのである。

「あらし」によって「物質文明によって汚辱された、魂の面を拂拭」させ、「驚異、敬虔、純真の感情」を新たにしなければならぬと考へた。そこで、作品では「改悛悔悟の行為を豫想」した「祟り（怨霊思想）」を暗示させ、「あらし」を起こし、町を亡ぼすのである。

物語の基本的性格の一つに「伝奇性」がある。その点で「物語」は現実と乖離している。「赤い蠟燭と人魚」の中の出来事の流れ、即ち、老夫婦の変心と裏切り、人々の無情、人魚の母親の悲しみ・怒り、売られた人魚のあわれさ、それらに対する神の怒りがリアリズムを離れ一つの結末に終着するのである。

作者未明は読者の心情を盛りつつ、「あらし」によって町を亡ぼす結末をとったのである。「あらし」によって町が亡ぶという解決方法は、「祟り（怨霊思想）」を信じていた読者である子供や庶民にとって、理論や理屈なしに納得できる解決方法だったのである。このような結末は、昔話、説話にいくつかが指摘できる（注30）。「あらしによる町の亡び」の解釈は、「物語」からは「伝奇性」、「昔話」からは「祟り（怨霊思想）」と「神からの罰」という点を読みとってなされねばならない。

このように考えると、鳥越氏の「ネガティブな結末」や菅氏、高橋氏、上氏等の「アナーキズム」な結末という解釈も包摂される。また、古田氏の「「あらし」は、象徴的な諸問題の解決

にはならない」という批判的を得たものでないことが了解されよう。

三 「赤い蠟燭と人魚」の物語性

「赤い蠟燭と人魚」には「伝承説話」、当時の「漁村の様子」や「町の生態」などが加えられた。中でも「伝承説話」には、従来言われてきた二つの「人魚塚伝説」以外に、「小さい話」、「竹取物語」、羽衣伝説、昔話などに見られる要素が類似点として指摘できる。それらが、未明の「赤い蠟燭と人魚」に、直接的に影響したのか、間接的に影響したのかは判然としない。しかし、「伝承説話」と未明が言う時、日本の伝承説話として脈々と流れていた諸要素を一旦受け取り、そこから新たな創作的付加を未明が行ったというべきであろう。

未明の創作的付加は、先に述べたように、「人魚像」が近代文学からもたらされていること、人魚の娘の性質に「赤い鳥」時代の児童観を反映させたこと、子どもを思ふ人魚の母親には、未明が理想とする人間像を反映させたこと、「あらし」による町の亡びには、日本古来の信仰「怨霊思想」が類推されること、などであった。

未明は「伝承説話」の地盤の上に、「人魚の母の思い」と「人間に裏切られた悲しみと怒り」「人間の墮落」を付加し、それらを「詩的ロマン」性のある文章で描いたのである。そこ

に、この作品の価値を見いだすべきであろう。

一九五〇年代、過去の作家の作品の再検討という形で「童話伝統批判」がおこる。そこで最も批判が集中したのが、小川未明の「赤い蠟燭と人魚」であった。宮川健郎氏は、児童文学史上、一九五〇年代を次のように述べる。

五〇年代の「童話伝統批判」のなかでうごいていたのは、「子ども」への関心ということだけではない。「童話伝統批判」をささえていた問題意識は、以下の三つだと考えられる。

- ①子どもへの関心―児童文学が描き、読者とする「子ども」を、生き生きしたものとしてつかまえなおす。
 - ②散文性の獲得―童話の詩的性格を克服する。
 - ③変革の意志―社会変革につながる児童文学をめざす。
- 右の三つは、たがいに、からみあいながら、児童文学の新しいあり方を実現していく。（「現代児童文学の語るも」NHKブックス一九九六・九 七二頁）

宮川氏のこの指摘は、「少年文学」の旗の下に」（注31）、それに連なる古田足日氏や鳥越信氏の論文や発言、「子どもと文学」（注32）を検討すれば首肯できる。そして、鳥越氏は「童話伝統批判」の真意を「未明童話が児童文学の王道主流ではないことをはつきりさせ、しかしそれとは別に未明童話の価

値を評価すること、これが戦後の未明伝統批判の真意だったと私は理解している」（注33）という。

川端康成は「小説の構成」（昭和十六年）で小説と物語の構成の違いを述べている。要約すると次のようになる。へ物語の筋組みは時間的継続のうちに配置されるが、小説は因果的關係において構成されなければならない。「王が死んだ。それから王妃が死んだ」といえば物語だが「王は死んだ。その悲しみのために王妃も死んだ」といえば構成である。小説の構成にも、もちろん時間の脈路はあるが、より因果の論理に負うのである。物語ならば、聞き手は「それから？」と尋ねるであろう。小説の読者は「どうして？」と考える。物語性と構成性との根本的な差異はここにある。（注34）

四 おわりに

未明の「赤い蠟燭と人魚」が、「小さき子」話、「竹取物語」、羽衣伝説、昔話を背景にして構成されていること、文体が語り調であること、老夫婦の変心が昔話のバターンを踏襲していることから、この作品が「物語」であることが首肯できる。「童話伝統批判」は、もともと「物語」であった「赤い蠟燭と

人魚」に小説性を求めた点が誤りであった。鳥越氏が主張する「未明童話の評価」は、小説の視点からではなく、「物語」の視点から評価されるべきである。

「童話伝統批判」のめざしたものは「リアリズム」であった。(注35)それが提示された作品としては、有島武郎の「一房の葡萄」がある。この点については別稿に俟ちたい。

(注)

注1 上笙一郎「未明童話の本質」勁草書房一九六六・八

注2 菅忠道「日本の児童文学1 総論(増補改訂版)」大月書店一九七

二・四

注3 上笙一郎「未明童話の本質」勁草書房一九六六・八

〈湯町稚子浜の人魚伝説〉

国府町がにぎやかな漁師町だったころ、魚とりが上手な男がいた。ある年の秋、月のない晩に、一人の女が男の家へやってきた。女は男に潮の底の世界や、網にかけられた親子の魚たちの話を語った。その話を聞いて、男は気がふさぎ、漁に出なくなった。それから、夜ごと女は男の家へやってきた。その女が来はじめてから、浜には魚が一匹もあがらなくなった。男は、日毎にやせ細り、枯れ木のようになった自分の手足を見て、恐ろしくなった。ある晩、男は女はどこから来るのか尋ねる。女は、山のお諏訪さまにともるみあかしを頼りに、小舟で佐渡からくると答えた。男は、恐ろしくなり、ある夕暮れ、お諏訪さまのみあかしを消した。その後、嵐がおきる。翌日、岬のはずれの岩

の上に、人魚が打ち上げられていた。男は、自分の家で漁の網に絡まれて死んでいた。それからというもの、国府の浜には魚が寄りつかず、町は荒れ果てた。風雨のひどい晩は、人魚塚には赤い灯火が燃えたり消えたりする。

上氏は人魚伝説と「赤い蠟燭と人魚」の共通点を七点指摘する。

①人魚の瞳と長い髪表現

②人魚の女に対する人間の背信・裏切り

③山の上の神社に夜ごとともる御神灯

④大きさの違いこそあれ、暗い海を行く船がある

⑤舟を逆立てて吹き荒れる大風

⑥嵐の後に町がさびれてしまう

⑦人魚の死後その塚の回りに燃えたり、消えたりする赤い灯火

注4 小山直嗣「統越佐の伝説」野島出版一九七二(本が手に入らない

めに大森郁之助「赤い蠟燭と人魚」非再話説一斑)「日本文学論

究」第三五冊よりの孫引きである。)

〈中頸城郡大潟町の人魚塚伝説〉

昔、明神様の常夜灯を目標に海を漕ぎ渡って来て逢い引きを続けたいた女がある夜、恋の行く末を恐れた相手に灯を消され、方向を失って覆り沈んだ。女の死顔は黒髪を散らしてさながら「人魚のよう」であった。

小山氏は、この話が浪曲「佐渡情話」の原型であり、小川未明「赤い蠟燭と人魚」のヒントにもなったという。

注5 大森郁之助「赤い蠟燭と人魚」非再話説一斑)「日本文学論究」

第五冊

大森氏は、小山氏の主張に対し、中須城郡大湊町の人魚塚伝説と「赤い蠟燭と人魚」の共通点を二点指摘し、反論する。

①人魚或いは人魚のような亡骸をさらすことになる女が主人公であること

②杜前の灯明が舟の遭難の因に用いられていることである。

しかし、①については「人魚のイメージが民間の伝承の内部に育ってきたというものではありえない」「近代文芸からの挿し木」であると考ええる。だとすれば、「未明にとって特に注意を払ういわれも無い亜流であるゆえにかえって無縁だったかと考えられる」。

②については、伝説で灯を消すのは男の不実だが、未明童話では人間の欲望に裏切られた人魚の怨みである。

注6 熊本大学文学部 森正人氏の講義「日本文学概論」を拝聴して

注7 鈴木・雄「物語文学の形成」『日本古典文学全集』小学館

注8 柳田國男の説である。柳田氏は、説話には固定的な伝承部分と自由な変化部分があるという原則的な確認から、語り手の創意が発揮されるのは、話の自由区域においてであるとし、『竹取物語』では求婚難題説話部分とする。後に、中国四川省の「竹姫」の昔話が、『竹取物語』の求婚難題説話と一致するものとして注目されたが、伝播の経過が不明であるため、この昔話が「竹取物語」の原拠と決められてはいない。

注9 野口元大「新潮日本古典集成 竹取物語」一九九四・五

注10 高橋亨「前期物語の語型」『日本文学』一九八六・五

注11 注9ならびに堀内秀晃「新日本古典文学大系17」参照。

注12 大森郁之助「赤い蠟燭と人魚」非再話説一説『日本文学論究』第三

五冊（國學院大学国語国文学会）参照。尚、日本の中世の人魚の図として、『家忠日記』（統史料大成 臨川書店）天正九年四月の余白に

次のような文と図三六があり、日本における人魚の概念は図のように顔と手は人間に似ていて、首から下は魚のようなものであったと思われる。

〈本文〉（一部字体を現行のものに変えた）

正月二十日二かんでんちへあかり候、
安土二而食人をノくい候、聲ハとの
こほしと鳴候、せいハ六尺二分、/
名ハ人魚云、

図36



注13 小川未明「母性の神秘」『定本小川未明小説全集6』講談社一九七九・一〇

注14 日本の怨霊思想の影響については、森正人氏（熊本大学）の御教示による。

注15 森正人氏（熊本大学）、安倍素子氏（尚絅大学）の御教示による。

注16 佐竹昭広「民話の思想」（中公文庫一九九〇・一二）によると、昔話の正直爺さんは善の理想像で「またうと」と呼ばれる。性格は温和で、正直で、弱い。そして「そのほかかみたいな美德によって現世に辛を受け、一期末でたく栄えるのである」と佐竹氏はいう。

注17 「子どもと文学」福音館一九九六・五（初出一九六〇）

注18 古田足目「近代童話の崩壊」『現代児童文学論』くろしお出版一九

八二・五(初出「小さい仲間」一九五四・二二)

注19 首忠道氏は、「赤い蠅燭と人魚」を児童問題に焦点を合わせて論じている。不幸な母親がわが子の幸福のために思つてする捨子、手工業における過酷な少年労働、人権を無視した人身売買などが、作品に反映されている。そして、この問題の根底には子供の人権を認めない封建的な児童観があるという。

注20 「赤い蠅燭と人魚」は一九二二年二月一日から二〇日まで「東京朝日新聞」に掲載された。社会背景をみると、一九二〇年頃は、戦争による好景気の反動として恐慌となり、倒産が相次ぎ、国民生活は苦しくなっていた。こうした中、一九二〇年の大逆事件以後沈滞していた労働農民運動は再び激化していった。そして、一九二〇年には日本で初めてのメーデーが行われた。このような社会背景の中、未明は一九一九年三月に機関紙「黒煙」を発行した。「黒煙」は労働者文学としての要素を深めていったので、弾圧の対象となり、翌年二月で廃刊となる。一九一九年七月、著作家組合に入り、堺利彦、長谷川如是、有島武郎などと親交を深める。そこで「思想とはどうゆうものであるか知った」(「文藝春秋」一九五一・二二)と言っている。一九二〇年一月、未明一家はスペイン風邪にかかる。未明は肺炎を併発し危険な状態となる。病気による出費で生活が苦しくなる。この状態を見て、加能作次郎、広津和郎ら文壇の作家十六名が、新潮社から「十六人集」を出版して印税を未明に贈った。同十二月、「日本社会主義同盟」が設立された。未明は大杉栄らとともにその発起人となった。しかし国家権力による弾圧で、一九二二年五月解散となる。このような

時期に「赤い蠅燭と人魚」は執筆されたのである。

注21 首忠道「日本の児童文学」大月書店一九五六・四 一三頁

注22 高橋美代子「小川未明童話論」新評論一九七五・一〇 一八八頁

注23 鳥越信「鑑賞日本現代文学35児童文学」角川書店一九八二・七 六

一頁

注24 上笙一郎「未明童話の本質」勁草書房一九八二・八 一五四・一五

五頁

注25 未明は「母性の神秘」(一定本小川未明全集6)講談社一九七九・

一〇)において、「科学のみで解決のできないものが人間性の中に存してゐる。母性の神秘といふことも私にはその一つと思はれる」とし、子供を「至純の愛と犠牲的精神を以て教育する母性愛のみが、よりよき人生を作り、より正しい社会を造るものである」と主張する。

注26 山折哲雄「たたり」『平凡社大百科事典9』一九八五

注27 「哲学大辞典」第二册 大日本百科辞典編輯所編纂

注28 注26参照。山折氏は、戦争の犠牲者をまつた靖国神社、また現在の不幸や病氣原因を先祖の霊の祟りとする新興宗教などがあると指摘する。

注29 山折哲雄編「日本の神(1)」(平凡社一九九五・五)によると、日本の神の特色の一つに「神の憑着性」がある。神が「目にもとらぬ速さで空間を飛んで、特定の場所や事物、または人間に憑着する」ということである。「赤い蠅燭と人魚」では人魚の母親に、神が憑着したと考えられる。

注30 大分昔話「瓜生島」の結末は島が沈む。「今昔物語集巻第三十

六」では、山が崩れて海となる。

注31 「復興樹の思想と文学」日本児童文学別冊（初出「少年文学」19早

大童話会一九五三）

注32 「子どもと文学」福音館一九九六・五（初出一九六〇）

注33 鳥越信「鑑賞日本現代文学35児童文学」角川書店一九八二・七

注34 川端康成「小説の構成」は、本が手に入らないために、鈴木一雄

「物語文学の形成」「日本古典文学全集」小学館よりの孫引きである。

注35 野上暁「日本児童文学の現代へ」バロル舎一九九八・九

作品「赤い蠟燭と人魚」の引用は名著複製全集近代文学館 小川未明

「赤い蠟燭と人魚」（一九六九・四）による。

（大学院第二十五回修了）